

Metro 第 42 号

「ラテン・アメリカにおける政治的熔解」

投稿文（日本語訳文）

2019年12月11日掲載

“ラテン・アメリカにおける動乱の連鎖”

東郷和彦

第二次世界大戦終了後の中南米では、キューバ革命の成功の下で共産主義化していく左派政権と、これを危険視する強権軍事政権の二つの勢力の間での分裂—抗争が激化した。冷戦の終了後、軍事政権が概ね民主化に向かって動き始めたことによって、各国ともに政治体制は安定化に向かって動き始めたが、経済政策において左派系・右派系共に成功せず、格差の拡大・民衆の不満の炸裂・ガバナンスの喪失現象が多数の国で発生した。2019年の秋に一举に顕在化したかに見える騒擾の連鎖は、概ね上述のような時代背景をもっている（メトロ 11号参照）。

現下の騒擾をベネズエラの経済熔解から再説してみよう（メトロ 23号・39号参照）。チャベス左派政権を継承したマドゥーロ政権は、経済政策の運用に完全に失敗した。2014年以降の超ハイパーインフレによる経済熔解によって、2018年までに400万人が難民として主に周辺国に難を逃れた。2019年6月にペルー（50万流入）、チリ（10万流入）、7月にはエクアドル（22万流入）が、ベネズエラ人の入国前査証の取得を義務付けた。現時点では難民の最大の受容国コロンビア（100万）こそその受容に寛大であるが、大量の難民流入は周辺国の経済社会を圧迫し始めたのである。国内政治的には、右派野党勢力がファン・グアイド国民議会議長の周囲に結集し、政治対立も激化の一途をたどっている。

2019年秋に入ると、ボリビアで10月20日大統領選挙が行われ、反米左派のモラレス大統領の勝利が一時伝えられたが、集票時の不正が伝えられ、11月10日モラレス氏は辞任、11日には、メキシコ（2018年からロペスオブラドール左派政権がしきる）に亡命、遠隔地からの闘争を宣言した。政権掌握を宣言した中道野党のカルロス・メサとの間に新たな抗争が激発した。

10月27日アルゼンティンの大統領選挙が行われ、ここでは逆に、中道右派の現職マウリシオ・マクリを左派のアルベルト・フェルナンデイスが4年ぶりにやぶって、当選を果たした。

激震はチリに及んでいる。2018年ピネラ大統領による中道右派政権が成立

していた同国では、経済格差と社会的不満から 10 月ごろから暴動が発生し、10 月 30 日ピネラ大統領は、APEC 首脳会議と COP25 の開催断念を公表せざるをえなくなった。右派政権のガバナンスの崩壊現象が起きているのである。

BRICS の一国として中南米最大の大国ブラジルでは、2019 年 1 月中道左派を倒し極右派からボルソナロ政権が成立した。しかし、同政権は「木材調達・食肉や大豆生産など農業と牧畜の振興・地下資源の採掘」を企図してアマゾン熱帯雨林の開発政策を採用。4 月には首都ブラジリアで大規模な先住民による反対デモが行われ、8 月には大規模森林火災が発生。9 月 24 日ボルソナロ大統領は国連総会で、アマゾン森林の開発は「国内問題」であるとして内外の乱開発批判派を攻撃した。しかし内外からの批判の波は高まっているようである。

左派勢力の力が、選挙による政権の掌握又は右派政権の失政によって台頭しているのがアルゼンティン、チリ、ブラジル。逆に左派政権の失政または選挙により権力を強化しているのが、ベネズエラ、ボリビアと、全体情勢は混沌としている。政治的熔解が拡散する中で、どの勢力も、解決の唯一の鍵となるべき有効で安定した経済政策が見つけれなくなっているのである。